

「架空の場所」 誘う描写

文人の
武蔵野

「ノルウェイの森」の〈武蔵野〉について、村上春樹の小説を原作とするトラン・アン・ユン監督の映画「ノルウェイの森」をヒントに、地理的な語りの戦略として解き明かしたのが高木彬の論文「『ノルウェイの森』と〈武蔵野〉」（『武蔵野文学館紀

村上春樹 ②



映画「ノルウェイの森」を撮ったトラン・アン・ユン監督

要」2015年3月）です。高木は、映画「ノルウェイの森」が、原作小説の冒頭で提示される「風景」をいかに映像化しているのか明らかにし

ています。

原作では、37歳の「僕」が飛行機の中で18年前のことを考える場面から物語は始まります。「僕の脳裏に最初に浮かぶ」のは、思い出したいはずの（忘れてはいけなはずの）直子の記憶ではなく「あの草原の風景」です。その「風景」だけが執拗に「まるで映画の中の象徴的なシーンみたいにくりかえしくりかえし僕の頭の中に浮かんでくる」と記されています。その場所

ます。

その描き方について高木は、「具体的な地理の詳述の後に匿名的な描写を接続」することにより、読者を「お伽噺ふうの架空の場所」に連れ出していると指摘します。映画「ノルウェイの森」は、原作通りに「京都の山の中」（あるいは「京都の山の中」を想起させる映像）を撮るところを選んでいますが、それは村上の記憶の語り方を読みとったからこそ必然なのではないか、と言えるかもしれません。

高木は、「僕」の記憶の中に刻まれた「風景」を「京都」という記号を経由したへどこでもない場所」とした上で、その場所を〈武蔵野〉と呼んでいます。

結論を先取りするならば、「直子」と「僕」が歩いたのは、地図上では「東京」であっても「京都」であっても、〈武蔵野〉の風景として語られているのです。（敬称略）（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。